

大学入試の思い出

昨日 16 日から大学共通試験（テスト）が始まった。写真は一昨日に撮った大阪市立大の入試会場。コロナ禍でキャンパスは閑散としていた。

次の写真は朝日新聞 16 日夕刊 1 面。左は「本やノートを読みながら試験会場に入る受験生たち=16 日午前 8 時 39 分、大阪大」、右は「試験の開始を待つ受験生たち。机には「X」印が貼られ、座席の間隔が開けられていた=同 9 時 14 分、東京大」。



センター試験から共通テストへと衣替えしたが、コロナ禍での最初の入試となった。まずは、受験生の皆さんの奮闘を願うばかりだ。ただでさえ緊張を強いられる入試であるが、受験生だけでなく、コロナ対策もあり、教職員の皆さんの苦労も並大抵ではないと思う。

今年の高校 3 年生は、コロナ禍の影響をまともに受け、大学入試「改革」に翻弄された。共通テストは大学入試センター試験の「後継」として 2017 年に導入が決まった。「改革」の目玉だった英語民間検定試験の活用と記述式問題は迷走の末、一昨年 11 月、12 月に中止となった。早くから準備してきた受験生の皆さんは、さぞ不安な気持ちであったことだろう。

現役時代の入試の思い出、記憶を記録しておきたい。

名古屋市立女子短大に就職したのは 1979 年である。この頃は「共通一次試験」時代だったが、短大独自の試験を実施していた。短大もまだ人気があり、試験の時期が遅かったのも、とにかく受験生が多かった。

短大キャンパスでは入試を実施できないので、名古屋大や南山大をお借りした。その設営から試験監督、採点と 1 週間近く作業に従事した。若手教員の負担は重かったが、文句を言いながら、よく働いたものだ。でも、入試の季節に先輩教員から多くのことを学ばせてもらった。手作業での集計など、今では考えられないことも多かったが、途中からコンピュータ化が進んで、作業が効率化された。

短大が名古屋市立大に統合再編され、人文社会学部になると、入試も変わっていった。1990 年に導入された「センター試験」と「学部試験」（前期と後期）が、1 月から 3 月まで続いた。その前後には編入学試験や留学生試験、そして大学院入試もあり、1 年の半分近くは入試と付き合い合った。監督や採点などは分担して務めたが、学部長などの役職につくことが多く、気の休まることはなかった。

35 年の大学教員生活を振り返ると、やはり入試という「一大行事」のことが、いまでも忘れられない。

(2021 年 1 月 17 日)